今月の読み物

# 歴史探訪 PartⅡ-㉘

江戸川木材工業株式会社
顧問　清　水　太　郎

平成の御世もあとひと月で、新元号は５月１日から令和と決まりました。

平成の初期に産声を上げた東海道ネットワークの会も、３月26日平成最後の例会が大磯で開かれました。

かっては相模国の国府が置かれておりました大磯宿は、宿場制度の定まる前から宿場として栄え、『曽我物語』や西行の和歌に見られるよう、明治期、温暖なこの地は、三井、三菱の別荘を始め伊藤博文、大隈重信、西園寺公望、徳川御三家、伊達家、鍋島家などの別荘が150以上避暑地として繁栄しました。

私が幼少の頃、吉田茂翁が総理大臣として君臨しており、東京へ公用車で上京する際、上下列車が通行する戸塚の踏切で待たされることに腹を立て、「ここを立体交差にせよ」と言い実現したのがワンマン道路と云われ、今も第２京浜として機能しています。

春とは云え、小雨そぼ降る大磯駅に20名の仲間が集まってまいりました。

秋庭会長は、到着開口一番、「今日は虎が雨だね。」と仰っておりました。駅の待合室に架けてある広重の浮世絵がありますが、日本橋から９番目の宿場、大磯のテーマを「虎が雨」（虎御前と曽我兄弟の悲恋伝説で御前の流した涙を雨に譬えた）とずばり指摘した秋庭会長の慧眼は素晴らしい。

最近、「東海道53次一気通貫ウォーク」を見事達成された上林氏は、平塚から大磯にかけて眺められる高麗山を称して、このあたりは渡来人が住んでいたと云っておられました。この歳になっても学ぶことは沢山あります。

今日の行程を順を追って進みます。

①大磯駅は松本順（良順）が海水浴客の利便のために伊藤博文首相に頼んで設置しました。現在の駅は関東大震災で崩壊以後大正14年に再建されたもので、近代化遺産（東日本駅100選）にも選ばれたモダンなデザインであります。

②澤田美紀記念館　澤田美紀は三菱財閥、岩崎弥太郎の孫娘、外交官澤田廉三に嫁ぎ、欧米各地に住む。敗戦後大磯にエリザベスサンダースホームを設立。進駐軍の弾圧にも耐え、若い米兵の欲望のはけ口となった公娼たちから生まれた混血孤児２千人を育て挙げた。最近なくなった衣笠氏はその一人でありました。氏は米国へ行って父親を探そうとしましたが、同僚の選手が「君が有名になれば父親が名乗り出てくるよ。」と諭され思いとどまったそうであります。記念館の正面はノアの方舟をかたどったといわれていますが、心なしか舟の先端のように見えます。

③妙大寺　乗舟山妙大寺は大磯駅の山側で、松本順（良順）の墓所、松本は江戸末期、長崎で和蘭医師　ポンペに学び、徳川幕府の奥医師、医学所頭取で法眼に叙せられた。14代将軍家茂に仕え、死を看取りました。維新後、日本政府の軍医総監を勤め、引退後、大磯妙大寺西側に住み、海水浴の効用を説き、ここ大磯海岸が海水浴発祥の地となった。丸型の墓碑は松本順の（創意の原型）を示すという。当初、墓は鴫立庵に置かれていたが、昭和29年にこの寺へ改葬された。

④延台寺　官経山延台寺は慶長４年日蓮宗、久遠寺法主日道の開山による。（『曽我物語』）によると、曽我兄弟の十郎が舞いの名手虎御前と親しくしているのを嫉妬した者が矢で殺そうとしたが、大石に当たって命拾いしたという伝承がある。爾後虎後石とうたわれ信仰の対象とされてきた。石は曽我堂に安置され、５年に１回開帳され触れることが出来る。狭い境内には虎御前供養塔や大磯宿遊女の墓も建つ。虎後石は力石としても使われた。

⑤新島襄終焉の地　同志社の創設者新島襄は友人の勧めによって明治22年11月から、ここにあった百足屋旅館愛松園で病気療養していたところ、翌明治23年になくなった。園は愛宕神社の高石にあり松が茂り大磯の海が望め、梅の古木が沢山あった様子。１月20日危篤に陥り、妻八重に『グッドバイ又会わん』と言い残して46才11ヶ月生涯を閉じた。

⑥鴫立庵は平安末期、西行法師が、三夕の名歌「心なき身にもあはれは知られけり鴫立つ沢の秋の夕暮れ」を詠んだ所縁の地。寛文４年（1664）小田原の外郎の孫崇雪が五智如来を安置し草庵を結んだ。先刻見た妙大寺で松本順の丸型の墓碑があり中空のため叩くとポンポンと軽快な音を立てます。入り口鴫立庵標石

の裏に「著画湘南凄絶地」とあり、湘南の地名、「中国湖南省にある洞庭湖のほとり湘江の南側を湘南といい、大磯がこの地に似ているところから湘南」と呼ばれるようになりました。尚、此の碑はレプリカで本物は大磯郷土資料館内にある。

⑦島崎藤村旧宅　藤村の足跡は、静岡の清見寺、長野の上田城でも見かけました。今日の訪問先は（万事簡素方自由なし）と静子夫人宛ての書簡のなかで、あの文豪が表現した晩年の住居です。藤村は明治５年（1872）信州木曽の馬籠村に生まれ晩年の２年半を当所で暮らし、昭和18年（1943）71才の生涯を閉じました。

⑧滄浪閣は、伊藤博文が妻梅子の療養地として白砂青松の地大磯を気に入り、ここに5,500坪の土地を取得して建てた別邸。博文は明治23年に小田原の父十蔵の隠居地に別邸を建て滄浪閣と名づけた。屋敷の中に、四賢堂を建て、三条実美、岩倉具視、大久保利通、木戸孝允を祀った。建物は戦後米軍に接収され、その後、昭和26年に西武鉄道に買収された。西武には大磯プリンスホテルの食堂として使われたが、平成17年手放した。

⑨松並木　大磯の松並木は大磯中学の先から延々と続き、岡崎宿、知立宿、御油宿など今も残る数少ない東海道五十三次の名残。

⑩旧吉田茂邸　本日最後の目玉　明治17年（1884）吉田茂の養父　吉田健三が大磯の土地を購入し、別荘を建てたのが始まり。養父亡き後、吉田茂氏が邸宅を引き継ぎました。昭和20年（1945）から生涯此の地で過ごしました。昭和30年代、数奇屋の大家吉田五十八氏が設計した新館をメインに再建しました。数年前火災で焼失しましたが、その大磯町が買い上げ、現在の形に再建、資料館として吉田氏が暮らしていた当時の面影を窺い知ることが出来ます。２階の窓から左手に相模湾、房総半島、晴れた日には正面に富士の雄姿を望むことが出来ます。中島健設計の日本庭園には銅像が建ち、日米講話条約締結の地、サンフランシスコの方角に顔を向けています。

吉田氏在住当時は、直通電話が首相官邸と結ばれ、リモートコントロールされていました。
家康が将軍の座を秀忠に譲り、駿府城に住み、大御所として君臨していた様を彷彿させます。

# 「木場ことば」

水揚げ

◆木場問屋はもちろん市内の仲買も店構えは堀や川筋に沿って荷揚場をもっていた。そこに船で荷が着く。肩当てをかけて若い衆が元気よくかついで荷揚げをする。これを水揚げといった。

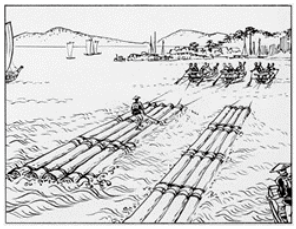
◆もちろん、いままでも船で入ってきた材木をおろすことを水揚げするといい、その仕事のために雇われてくる働き手を、水揚人足と呼んでいるが昔の面影はない。

◆船でなくて筏で送られてきた小丸太や、足場丸太など、筏をほぐして陸に上げることは水切りという。護岸が高くなり筏が着いて仕事のできる場所がなくなり、この風景はもはや見られなくなったが、ときには、ウインチで米松大角などを堀からトラックにつり上げて積むときは水切りと称する。

◆水揚げは、木場ことばのばあいには、そのもの自体を指していて隠当であるが、ほかに物騒きわまる用途がある。「未通女を揚げるからミズアゲである。」という解説のある花柳語がそれである。

◆メータクの運転手は、その日の稼ぎ高を水揚げとしやれのめす。水揚げがすくないと会社がぶつぶつぬかすからなどとよくグチを聞かされることだ。お花の方では水揚法というのは秘伝にさえなっている。竹の水揚げは酒でやる。牡丹は切口を炭化するといった類である。

引用文献：『木場ことば集』　宮原省久編著　東京木材市場
株式会社　昭和44年（1969年）11月　p.50～p.51



出典：和歌山木材史